

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月15日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520392

研究課題名（和文） 主語・目的語省略現象の比較統語論的研究

研究課題名（英文） A Comparative Syntactic Study of Ellipsis of Subjects and Objects

研究代表者

高橋 大厚（TAKAHASHI DAIKO）

東北大学・大学院国際文化研究科・准教授

研究者番号：00272021

研究成果の概要（和文）：日本語と同様の主語・目的語の省略が観察されるか否かという観点から、トルコ語、中国語、バスク語など空主語・空目的語を許す言語を調査した。日本語と同様に主語と目的語いずれの省略も許す言語がある一方で、いずれの省略も許さない言語や目的語の省略は許すが主語の省略は許さない言語が存在することがわかった。この調査により、観察された言語間の相違は一致現象の有無と関係があることが論じられた。

研究成果の概要（英文）：This study examined several languages that allow null subjects and objects, such as Turkish, Chinese, Basque, and so on, with the aim of determining whether they permit those null elements to arise through ellipsis. It has been discovered that while some languages are like Japanese in allowing both subjects and objects to be elided, others do not permit either to be elided or only allow objects to be elided. It is argued in this study that the observed cross-linguistic variation is related to the presence or absence of the agreement phenomenon in the languages in question.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：統語論

1. 研究開始当初の背景

生成統語論において省略現象は盛んに研究されてきたトピックの一つであるが、主語や

目的語の省略は比較的最近になって取り上げられるようになってきた。それ故、そのような省略がどの言語に観察されるのか、その通言語的分布にどのような原理・パラメーターが

関与しているのか解明することが当該分野における研究課題の一つである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本語に観察される主語・目的語の省略現象を極小主義統語理論の観点から分析し、それに基づき複数の言語に見られる空主語・空目的語と日本語の省略によって生成された空主語・空目的語との類似点・相違点を精査し、それらの類似点・相違点の背後にある普遍文法の原理・パラメータを解明し普遍文法理論の精緻化を図ることである。

3. 研究の方法

(1) 省略現象の理論的研究・・・省略現象一般に対して従来提案されてきた理論的メカニズム、及び日本語に観察される主語・目的語の省略に関してこれまで提案されてきた仮説に、文献調査を中心に精通する。自身の調査により得られたデータと従来の仮説の整合性、現在の理論的枠組みのもとでの分析法について考察する。

(2) 主語・目的語省略のデータ収集・・・日本語以外の、空主語・空目的語言語を許す言語に主語・目的語の省略が観察されるかどうかを、文献調査と母語話者へのインフォーマント調査により調べる。対象言語は、補助金申請時において、韓国語、モンゴル語、中国語、トルコ語、バスク語、アメリカ手話を予定していた。

4. 研究成果

(1) データ収集に関しては、ほぼ計画通りに行われた。トルコ語と中国語については、その言語の母語話者である、自身が指導する大学院生、過去に授業で教えその後共同研究を続けている研究者からのデータ収集を中心に行い、それらが目的語の省略を許す一方、主語の省略は許さないということを示す証拠を得た。

韓国語については母語話者への調査を行い、自身が過去に得ていたデータの正確性を確認した。モンゴル語とアメリカ手話に関しては、自身が指導する大学院生、過去に授業で教えその後親交が続いている他大学院の大学院生の研究を通してデータを得ることができた。その結果、韓国語とモンゴル語は、自身が過去の研究で示唆したように、日本語と同様に主語・目的語いずれの省略も許すことを確認した。アメリカ手話については、今後さらなるデータの検証が必要ではあるが、その空主語・空目的語は省略により生成され

ることができないことを示すデータを得た。バスク語については、スペイン・バスク地方に赴き、母語話者である言語学者に直接インフォーマント調査を行った。得られた結果は、解釈が難しいものが一部あるが、概ねバスク語では主語・目的語の省略が許されないことを示すものであった。

上記の自身の調査により得られたデータは従来の文献にはないものであり、今後の自身の研究のみならず他の研究者の研究にとって貴重な資料となることが期待される。

(2) 上記の文献調査及びインフォーマント調査により得られたデータの分析であるが、従来先行研究において提案された、主語・目的語省略をかき混ぜ現象（自由語順現象）と関連づける仮説と一致現象の欠如と関係づける仮説の二つの仮説と照合することにより行った。主語・目的語省略をかき混ぜ現象（自由語順現象）と関連づける仮説では、日本語と同様にかき混ぜを許す韓国語とモンゴル語で日本語と同様に当該省略現象が観察される事実が説明できる一方、かき混ぜを有さない中国語で目的語の省略が可能である事実が説明できないことを論じた。

他方、主語・目的語省略を一致現象の欠如と関連づける仮説では、日本語と同様一致のない韓国語とモンゴル語で当該省略が許されることを説明できることに加えて、トルコ語で一致を示さない目的語が省略されうること、一致を示す主語が省略されないことも説明できることを論じた。日本語と同様一致を示さない中国語で目的語が省略されることも容易に説明できるが、主語が省略されないことは説明を要する。これについては、中国語に非顕在的な種類の一致を主語と機能範疇の間に仮定する先行研究の提案を受け入れることにより解決できることを論じた。

また、バスク語において主語・目的語省略が許されない傾向があることは、その言語が主語のみならず目的語も機能範疇との一致を示すことから容易に説明できる。アメリカ手話がやはり主語・目的語省略を許さないことも、その言語が主語・目的語と機能範疇との一致を示すという近年提案された仮説を採用することにより説明できる。

まとめると、本研究の成果として、主語・目的語の省略には一致現象の欠如が必要条件であるという仮説の妥当性が示されたことが挙げられる。また、視点を変えて、主語・目的語省略の研究はある言語において一致現象が存在するか否かを検証する際に有用であることも付言する。

最後に、日本語の主語・目的語省略現象に観察される、先行文と省略を含む文との間の平行性を詳細に考察した結果、主語や目的語が省略をうけるためには、単にそれらの先行

詞となる名詞句が先行文中に存在するだけでは不十分で、省略される句と先行名詞句が同様の領域に生じていることが必要であることを指摘し、この領域が近年極小主義統語理論で仮定されているフェイズにより規定されることを論じた。このことは、省略現象の研究が文の生成に関わる理論モデルに少なからず示唆を与えることができるという点で重要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- (1) Takahashi, Daiko (to appear) “Argument Ellipsis, Anti-agreement, and Scrambling.” In Mamoru Saito ed. *Japanese Syntax in Comparative Perspective*. (査読有)
- (2) Şener, Serkan and Daiko Takahashi (2010) “Argument Ellipsis in Japanese and Turkish.” *MIT Working Papers in Linguistics 61: Proceedings of the 6th Workshop on Altaic Formal Linguistics*: 325-339. Department of Linguistics and Philosophy. MIT. (査読無)
- (3) Şener, Serkan and Daiko Takahashi (2010) “Ellipsis of Arguments in Japanese and Turkish.” *Nanzan Linguistics 6*: 79-99. (査読無)
- (4) Takahashi, Daiko (2009) “A Note on Ellipsis of Quantificational Objects in Japanese.” In Hiroto Hoshi ed. *The Dynamics of the Language Faculty: Perspectives from Linguistics and Cognitive Neuroscience*: 163-175. (査読無)
- (5) Takahashi, Daiko. “Comparative Syntax of Argument Ellipsis.” Fukuoka Linguistic Circle. July 17, 2010. Kyusyu University.
- (6) Takahashi, Daiko. “Argument Ellipsis, Anti-agreement, and Scrambling.” The 8th Workshop of the International Research Project on Comparative Syntax and Language Acquisition. March 14, 2010. Nanzan University.
- (3) Kimura, Hiroko and Daiko Takahashi. “NPI and Predicative Remnants in Japanese Sluicing.” The 19th Japanese/Korean Linguistics Conference. November 12-14, 2009. University of Hawai’i at Mānoa.
- (4) Şener, Serkan and Daiko Takahashi. “Argument Ellipsis in Japanese and Turkish.” The 6th Workshop on Altaic Formal Linguistics. September 4-6, 2009. Nagoya University.
- (5) Kimura, Hiroko and Daiko Takahashi. “A Wh-in-Situ Analysis of Sluicing.” The 5th Workshop on the International Research Project on Comparative Syntax and Language Acquisition. September 13, 2009. Nanzan University.
- (6) Kimura, Hiroko and Daiko Takahashi. “In-Situ Remnants in Sluicing.” The Yokohama National University 2nd International Workshop on Chains in Minimalism. August 3, 2009. Yokohama National University.

- (7) Takahashi, Daiko. “Comparative Syntax of Argument Ellipsis.” The 3rd Workshop of the International Research Project on Comparative Syntax and Language Acquisition. March 12, 2009. Nanzan University.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 大厚 (TAKAHASHI DAIKO)
東北大学・大学院国際文化研究科・准教授
研究者番号：00272021

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：